

連載 (供覧) いはひまつりのみち

宗教は人を殺し、祭祀は人を生かす
世界平和のための祭祀を復興させる

第三十一回 宗教の全否定

南出喜久治 (令和7年12月1日記す)

ちちははと とほつおやから すみめおや やほよろづへの くにからのみち
(父母と遠つ祖先から皇御祖八百万神への国幹の道)

祭祀の場合は、祖先の最上級が皇祖皇宗、八百万の神々へとつながって、その果てに、やんごとなきお方を御尾座すとの想念がありましたが、宗教は、祖先などこれらを全否定して、いきなり超越的な絶対者としての God を作り出したのです。

これは、三大宗教その他宗教のすべてに共通したもので、これには、次のような致命的な矛盾があります。

まづ、すべての宗教には、循環論法といふ矛盾があります。循環論法といふのは、論点先取りの虚偽の一つで、論証すべき前提の事柄を論証の根拠とするために、相互に堂々巡りするものです。

たとへば、キリスト教やイスラム教の God の場合では、人間は、理性のはたらきによつて God を想念しました。本能だけで生活してゐる他の動物は、理性の働きがないので God を想念することができません。つまり、God は人間が理性によつて作られたものなのです。ところが、教義では、人間は God によつて作られたとするのです。

ですから、どうして God によつて人間が作られたのか、といふ問いに対して、その God は人間の理性による想念で作られたものであると答へざるを得ません。そして、また、God によつて人間が作られたのか、といふ問いに戻ることで、これが堂々巡りして結論が出ません。これが、論点先取りの虚偽である循環論法の矛盾の典型なのです。

仏教の場合も同じです。経典に書かれてゐるのは、本尊の言葉であるかについて論証する場合、経典が本尊の言葉であることはその経典に書かれてゐると答へることになるので、これも堂々巡りになります。

仏(ほとけ)が衆生済度するといふ仮説によつて組み立てられた教義を何の根拠もなく信者に押し付け、それが実現しえないことの説明もせず、八正道を説きもせず、ただ本尊を信じることを求めて布施を要求するのが仏教なのです。

このことは、キリスト教とイスラム教の場合も、経典を聖書と、本尊を God に置き換へ

れば同じことになり、堂々巡りの矛盾から逃れられません。

ところが、宗教は、この矛盾を指摘されると、このような矛盾と思はれる非論理性もまた、宗教の「神秘性」を支へるものであるとまで言つて開き直るのです。

このやうに、宗教を否定するのは、その教義の問題ではなく、その前提となる論理の問題であり、その論理が破綻してゐるためなのです。